

潜伏キリシタン集落の歴史的背景を考えてみましょう(その2)

- 外海から五島へ -

さて、ここからは大村藩の地誌書である「郷村記」と、九大の岩崎義則先生の研究を参照します。大村藩の人口は幕末期の神浦村が5千人を超え、三重村も3千人を超えているように、平戸藩と比べても総じて多く、年貢を安定的に徴収するためには、貧農を増やさないう産児制限・分家抑制が必要でした。「郷村記」の黒崎村のところにある「子捨河」はそうしたことを示唆しているようです。藩としては「米・麦」あるいは「銀」を徴収したいのです。江戸時代の京・大坂、西日本は銀本位の経済でした。

一方、海の向こうの五島列島では、^{ほうそう}疱瘡(天然痘)が大流行し、人手が足らず人口減少に苦しんでいました。ご存じのように五島は海の幸が豊かですが、それを産業に昇華させるためには、漁村集落を支える背景も重要です。米穀などの食糧や^{たきぎ}薪・木炭など生活品も供給されなければなりません。

そこで、1797年に大村藩と五島藩の間で、大村領民を五島に移住させるという協定が結ばれました。双方の藩に利益がある協定です。外海黒崎村・三重村から108人が福江島に移住したのが最初で、こうした公式移住以外にも、外海地区と五島列島の間には、船を住居として生活する家船^{えぶね}の人々の往来などが以前からあったと推測されます。

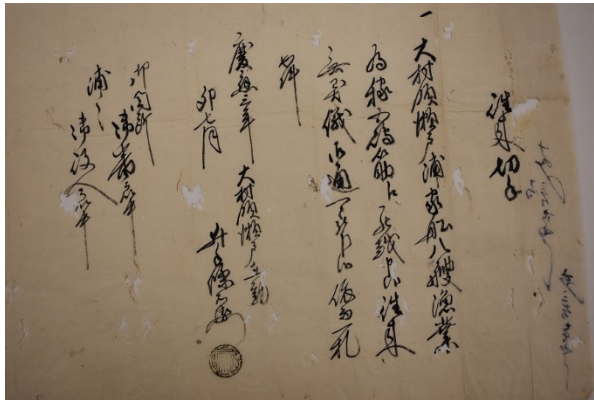
それでは、上五島中通島の、とある漁村を想像してみましょう。海岸部には漁師とその家族の集落が密集しており、その背後の山間部にも集落が点在しています。外海からの移住者は海岸部には居住できず、やせた急傾斜の山間部に芋畑を開墾、冬季の^{すさ}凄まじい季節風対策として、人家のまわりに防風林・石垣を巡らして住まいました。海岸部の漁師との良好な社会関係も大切です。

家族を持ちたかった外海からの移住者にとって五島は希望の地であり「五島やさしや土地までも」と俗謡に歌われました。そして、移住者の多くが潜伏キリシタンだったと思われます。その影響もあって幕末の五島藩の人口は、1793年の29,454人から5千人以上増加しました。「郷村記」には、寛政の始めから神浦村を出て五島に移住した者がおよそ500人、そこで段々増えて神浦^{いづき}居付集落が数か所ある、と記されています。上五島の江袋教会で、長老・尾上さんにご先祖はどこから来られたのですかとお尋ねしたところ、神浦らしいと答えられましたが、現在その神浦本村部には、潜伏信徒やカトリック信徒ゆかりの方はおられません。神浦村では潜伏キリシタンの組織ごと五島へ渡っ

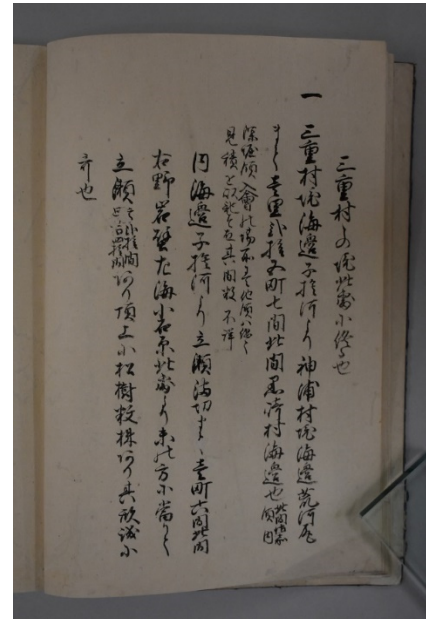
たのではないでしょうか。

今日、新上五島町には29の教会があります。もちろん近代になってキリスト教信仰が認められて以降に創建されたものです。現在県外にお住いの、元長崎県副知事の奥様は、29全部回りました、と言われました。教会は潜伏集落が存在したことを証明するものであり、拙著『世界遺産 キリシタンの里』では、潜伏時代からの厳しい歴史が集積している集落を「人が良くなる空間」と表現しました。中通島だけでなく野崎島・若松島・奈留島・久賀島・福江島にも同様存在しています。

【長崎県長崎学アドバイザー 本馬 貞夫】



家船五島へ 往来切手



郷村記(黒崎村)「子捨河」